

第4回(2012. 6. 6 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

墳墓と古墳

「墳墓」とか「古墳」という言葉は、いずれ誰しもお世話になるところなので、よく知られていますが、現在の墓地埋葬法では「死体を埋葬または焼骨を埋蔵する施設」を「墳墓」と呼びます。「古墳」とは文字どおり古い時代の墓のことですが、もう少し詳しくおさらいしてみましょう。

古墳は、一般的には3世紀から7世紀にかけて造られた墳墓を指す言葉ですが、考古学上ではもっと限定しており、3世紀から7世紀の、土や石で丘を造り、その中に埋葬設備をほどこして遺体や副葬品を埋葬した施設全体を指す言葉です。日本の歴史区分ではこの時代を「古墳時代」と呼んでいます。

縄文時代には死体は貝塚に埋められていたり、小さな子供は縦穴式住居の入口に埋葬されたりしていました。縄文時代後期から弥生時代にかけては一定区画に葬られて、場所によっては大きな土器の甕に死体を入れて、同じような甕を上からかぶせて埋葬する風習があります。これを甕棺(かめかん)と呼びます。弥生時代の後期になると、古墳の原型ともいわれている墳丘墓が造られます。その後はだんだんと古墳が巨大化して、現在大阪堺市にある大仙古墳は、全長486メートル、3重の濠の内側だけでも面積が46万5千㎡もあり、エジプトのクフ王のピラミッドや秦の始皇帝の墳丘より墓域の面積が大きくて世界最大です。5世紀中頃の前方後円墳で、仁徳(にんとく)天皇(第16代天皇)の御陵だと伝えられていますが、学問上は特定できていません。

古墳にはお椀を伏せたような「円墳」が最も多い形ですが、そのほかに真四角な「方墳」、円墳と方墳とを連続させたような「前方後円墳」、あるいは方墳の上に円墳を乗せたような「上円下方墳」、円墳の両側に方墳を連続させた「双方中円墳」などがあります。そして、鏡や玉、環などの装飾品や刀剣、甲冑などの武具武器、あるいは農具、漁具などの生活用品などが埋葬され、同時に埴輪などが発見されますが、埴輪(※1)は殉葬(殉死者の埋葬)という風習の代わりに作製された『日本書紀』にあります。しかし、近年の研究では、墳丘部や裾の部分で多く発見されていることから、かならずしも殉葬の代用ではないと考えられています。また、巨大古墳と出土する副葬品の鏡などについては、邪馬台国論争(※2)の的にもなっています。

巨大古墳は、なぜか5世紀を頂点に、その後は小型の円墳が主体となってきます。そして、7世紀には古墳自体が見られなくなりますが、大化2年(646)に手厚い埋葬を禁じる「大化の薄葬令」によって、貴族社会にも細かな埋葬規定が定められたことや、仏教の影響で火葬が浸透したことも原因で、だんだんと古墳のような埋葬形態が減少していったものと思われます。

奈良県には5000以上の古墳があります。現在、宮内庁が管理している天皇・皇后の陵墓は200ヶ所近くあり、皇子・皇女の墓を合わせると数百ヶ所になると言われています。発掘調査が出来ればかなりのことがわかるのですが、残念ながら天皇家のお墓を勝手に掘るわけにはいかないのが現状です。

昭和47年(1972)、奈良県明日香村にある高松塚古墳で、極採色に彩られた壁画が発見され、大きな話題となりました。男女の人物群像、四神、日、月、星宿などが描かれていましたが、人物群像があまりにも衝撃的だったもので、人物像だけが大きく報道されました。その後、同じ明日香村で発掘されたキトラ古墳の玄室(遺体を納めた部屋)で、北面の壁に玄武(げんぶ)と

いう亀に蛇が絡んでいる神獣の壁画を皮切りに、東面の壁の青龍、西面の壁の白虎という想像上の神獣を描いた壁画が次々と確認され、平成 13 年(2001)には南面の壁に朱雀の絵が確認されて大騒ぎになりました。玄武は山、青龍は大河、白虎は道、朱雀は水を意味していると言われており、古代中国の陰陽道の四神相応という思想からきています。古代の都の建設にはこの思想に則って行われてきましたし、現在でも大相撲の土俵の上から下がっている赤、白、黒、青の房もその思想からきています。また、玄室の天井には、北極星や北斗七星をはじめとする天体図が描かれていますが、これは東アジア最古の天体図だとも言われています。

ところで、古墳といえば高松塚古墳や將軍塚古墳などいろいろな名前の古墳が各地にあります。キトラ古墳とは変わった名前であり、しかもカタカナも珍しい。あるとき、最初に盗掘した墓泥棒が古墳に穴を開けたところ、亀(玄武)と虎(白虎)の絵を見てびっくりして逃げ帰ったということが村人に伝わって、そこからキトラ(亀虎)古墳と名付けたという話を聞きました。しかし、知人の考古学者によると、古墳の周りの地名が字「北浦」だから、それが変じてキトラになったのだと言いますが、考古学は古い事柄を調べて古代を探求する夢のある学問だから、地名よりも墓泥棒の亀と虎の話の方がずっと夢のある話であると思うのですがね。

(※1) 埴輪

「埴輪(はにわ)」は古墳時代に作られた主に古墳の周囲から発見される土製品で、円筒形埴輪や人物、動物、あるいは家や船などの形をした形象埴輪があり、その用途には議論が分かれるところです。円筒型をした埴輪は主として墳墓の聖域を区画するため、形象埴輪は生前の様子を再現したと考えられています。人物をかたどった埴輪は、殉死者を埋める代わりに土製の人馬を立てたということが『日本書紀』にもあることから、これが埴輪の起源とする説が採られた時期もありましたが、現在では否定的で、祭祀、葬送儀礼の慣習ではないかと考えられています。

変わったところでは、平成 12 年(2001)に松阪市宝塚で発見された船の形をした埴輪は、全長 140 cm の日本最大の船型埴輪です。また、奈良県桜井市のメスリ山古墳の円筒形埴輪は、全長 242 cm、最大直径 90 cm で、これも国内最大の円筒形埴輪です。また、埼玉県江南町の野原古墳群からは、「踊る男女の埴輪」が発見されていますが、これら形象埴輪の形や文様などにより、古代の生活や風習がわかる貴重な資料でもあります。

(※2) 邪馬台国論争

中国の『魏志倭人伝』に出てくる「邪馬台国」の位置を巡って、昔から学者の間で大きく議論されていますが、多くは畿内説と九州説に分かれて大論争を展開しています。それは『魏志倭人伝』にある邪馬台国の位置などについての記述に多くの謎があるからです。ちなみに、邪馬台は一般的には「やまたい」と発音しますが、それは慣用的な読み方で、「やまと」と読むべきだという説があります。

『魏志倭人伝』の記述の中で、邪馬台国は玄界灘を渡り、対馬、壱岐から末盧(まつろ)国(佐賀県松浦郡)に上陸、東南に五百里で伊都(いと)国(福岡県糸島郡)、さらに東南に百里で奴(な)国(福岡県那珂郡)に着くが、その先は「東行、不弥(ふみ)国に至る百里、投馬(つま)国に至る水行二十日、邪馬台国に至る水行十日陸行一月」と書いてあり、不弥国や投馬国をどこに当てはめるかによってまったく違ってきます。

投馬国について、九州説は鹿児島県や宮崎県、畿内説は山口県や出雲地方などに当てはめていますが、邪馬台国が水行十日陸行一月の記述のとおりなら、はるか南シナ海の海上になってしまいます。九州説は、距離をもっと縮小しなければ合致しないし、畿内説は、そもそもの「東行」を「南」に変換しなければ成り立たない。つまり、九州説は方角は合うが距離が合わないし、畿内説は距離は合うが方角が合わないのです。

記録にある卑弥呼が貰ったという 100 枚の銅鏡は、畿内説では「三角縁神獸鏡(さんかくぶちしんじゅうきょう)」だと考えられています。この鏡は円形で鏡の縁の断面が三角で、裏面に神獸の様子が描かれている銅製の鏡のことです。これは畿内に集中して発見されていますし、また、卑弥呼の墓が百数十mもある巨大な古墳であると書いてあることなどから、巨大古墳が集中している畿内説が有力なのですが、三角縁神獸鏡は 100 枚以上発見されていることや中国では発見されていないことなどから、決定的な証拠としては弱いものがあります。

また、古墳の分布状態から大和政権への継承、邪馬台国と大和の音韻が似ていることなどから、畿内説が有力だとか、九州にあった邪馬台国などが、東征の結果畿内に至る途中で大和政権ができたという説や、大陸の北部から騎馬民族がやってきて大和政権を樹立した、などという説もあります。『魏志倭人伝』の曖昧な記述に振り回されているのが原因なのですが、日本に記録がないから、この曖昧な中国の文献に頼るしかないのが悲しいですね。

(篠井純四郎)